



永石 匡司 先生

#### 略歴

1987年 日本大学医学部医学科卒業  
1991年 日本大学大学院医学研究科博士課程外科系産婦人科卒業（医学博士）  
2004年 日本大学医学部産婦人科学講師（専任扱）  
2015年 日本大学医学部産婦人科学系産婦人科学分野准教授（研究所）  
日本大学病院婦人科科长  
現在に至る

#### 資格

日本産科婦人科学会 専門医・指導医,  
日本女性医学学会 女性ヘルスケア専門医・指導医,  
日本がん治療認定医機構 がん治療認定医,  
日本産科婦人科内視鏡学会 腹腔鏡認定医・子宮鏡認定医,  
日本医師会認定 産業医, 東京都医師会認定 母体保護法指定医,  
日本周産期・新生児医学会 新生児蘇生法専門コースインストラクター

## 歯科衛生士に知ってほしい女性の身体の基本知識

日本大学医学部産婦人科学系産婦人科分野（日本大学病院）  
永石 匡司

我々の一生は受精卵が母の子宮内膜に着床した時点から始まっている。ある時期に性が選択され、第一次性徴として胎内で成長、発達がすすみ、第一帝位とともに生を受ける。そのあと女性のライフステージは小児期、思春期、性成熟期、(妊娠期)、更年期、老年期と進んでいく。小児期ですでに解剖学的、生理学的、精神的に性差は決定されている。思春期は身体的に未熟な小児期から性的に熟す性成熟期への移行段階で、心身のアンバランスがあるなか、成長、発達していくことになる。わが国の現状では7-9歳ころから17-18歳ころまでになる。この時期は身長著しい増加があるが、最も特徴的な変化は性的のもので、性機能の発現開始、すなわち乳房発育や陰毛発生などの出現、初経を経て第二次性徴は完成し、月経周期がほぼ順調になる。性成熟期は女性として心身ともに熟した時期で、生殖器は完全に女性としての機能を発揮する。月経は排卵を中心に規則正しい周期で繰り返され、内分泌学的には月経周期に伴う視床下部からの性腺刺激ホルモン放出ホルモン、下垂体からの卵胞刺激ホルモン、黄体化ホルモン、卵巣からの卵胞ホルモン、黄体ホルモンなどの周期的変動が認められる。またこの期間に妊娠・分娩・産褥などの特異的な内分泌環境が形成されることになる。この時期は基本的に女性のホルモンが安定するが、人生にとって大きなイベントを迎えることになり、パートナーとともに仕事と家庭、育児のバランスをとっていく。その後、40歳代から女性ホルモンが低下することにより再び精神的、肉体的にアンバランスを生じやすくなる。更年期は生殖期から老年期への移行段階であり、閉経の前後5年間をいう。加齢に伴い性腺機能は衰退し、特に卵巣では排卵などの機能が消失しはじめ、月経不順から無月経、閉経に向かう。この頃から脂質代謝異常や骨量減少といった疾患に見舞われるようになる。わが国の平均閉経年齢は50.5歳である。しかし、長寿世界一を誇る日本ではまだ人生の折り返し地点である。そのあと女性ホルモンが欠落した老年期に入るが、なお人生が謳歌できる年月が残されている。老年期は更年期を経て卵巣機能が完全に消失した状態で、生殖能力がなくなった時期である。通常56-60歳以後をいい、性ホルモンの分泌は極度に低下し、更年期に始まった生殖器の萎縮は顕著となる。老化により体重は減少し、皮下脂肪も減少、皮膚は弾力消失し、さまざまな老化現象が進んでいく。

今回はこの女性のライフステージのなかで女性ホルモンが大きく影響している思春期・性成熟期・更年期に焦点をあてて、女性ホルモンの変化とそれに付随した心身の変化、特徴的疾患について解説する。



川本 亜紀 先生

#### 略歴

1994年 日本女子大学文学部 卒業  
2001年 日本大学歯学部附属歯科衛生専門学校 卒業  
2001年～ 日本大学歯学部附属歯科病院勤務  
現在に至る

特定非営利活動法人日本歯周病学会認定歯科衛生士

日本抗加齢医学会指導士

第96回アメリカ歯周病学会日本歯周病学会共催学術大会（2010年）歯科衛生士部門最優秀賞

第54回秋季日本歯周病学会学術大会（2013年）ベストハイジニスト賞

## ウーマンズオーラルヘルス ～女性ホルモンと歯周病～

日本大学歯学部附属歯科病院 歯科衛生室  
川本 亜紀

歯周病はプラーク中の細菌による感染症であり、様々なリスク因子によって発症と進行は左右される。そのリスク因子として、主因子である細菌のほかに、修飾因子として宿主、環境、咬合が挙げられる。そして、女性では、その宿主因子の一つに女性ホルモンの変動が考えられる。

平成17年および28年の歯科疾患実態調査において、女性は1日2回以上歯を磨く人の割合が多く、男性より歯磨きの回数および補助的清掃用具の使用率が多いことが報告されている。さらに、平成19年および28年の国民生活基礎調査においても、女性の方が男性より約1.2倍歯科を受診していると報告されている。しかし、歯科疾患実態調査の「20本以上の歯を有する者の割合」は平成17年では55歳以上で、28年では75歳以上で、女性の方が男性よりも少ないという結果になっている。

女性は成熟して思春期に達すると、脳の視床下部から放出する様々なホルモンの刺激により、卵巣からエストロゲンとプロゲステロンの分泌が始まる。エストロゲンは、妊娠に不可欠な卵胞を受精可能な卵へと成長させ、受精卵が着床できるように子宮内膜に厚みを持たせる役割がある。また、「肌の潤いとハリを保つ」、「髪の毛を促進する」、「代謝を促し肥満を予防する」、「悪玉コレステロールを減少させる」、「カルシウムを蓄積させて骨を丈夫にする」などの役割もある。一方、プロゲステロンは、妊娠を維持するのに大切なホルモンであり、主に着床への環境整備の役割を担っている。そのため、プロゲステロンが分泌されている期間は、身体が妊娠した時と同じ状態になり、月経前に「胸が張る」、「体がむくむ」、「便秘になる」、「イライラする」といった症状が出る。これらの女性ホルモンは生涯を通して女性の身体に深く関わっている。女性ホルモンの分泌量は、一般的に20～30歳前半にピークを迎え、その後は低下して45～55歳に閉経を迎えると欠乏する。そのため、思春期、妊娠期における女性ホルモンの産生亢進や更年期における女性ホルモンの欠乏により歯周病進行のリスクが高くなることが報告されている。

本講演では、今まであまりクローズアップされてこなかった女性ホルモンの変動による女性に特有な歯周病のリスク、および「月経周期」、「妊娠期」、「更年期」それぞれの口腔衛生管理について解説する。